

乳幼児をとりまく環境が日本人の児童・青年期の身体発達と体力に与える影響
Influence that environment at infants time on physical development and fitness of
the childhood and adolescent

1K07A082-1

指導教員 主査 鳥居 俊 先生

久保田 祥哉

副査 岡 浩一朗 先生

【緒言】

現代において、経済が発展するとともに生活全体が便利になり、一人一人にかかる労力が軽減され、ただ生活するだけであれば、必ずしも高い体力や多くの運動量を必要としなくなっている。体力は、人間の発達・成長をさせ、人として創造的な活動をするために必要不可欠なものである。健康と体力とは表裏一体の関連をもち、それぞれの年齢で求められる健康や体力のあり方には、少しずつ内容の違いがあるが、生涯を通して共通する要素も多い。また、平成年代になってから特に少子高齢化が問題となっており、その少子高齢化社会対策問題とも関連して、運動の機会の減少や生活習慣の乱れによる子どもや青少年の体力・運動能力の低下が危惧されてきた。子どもの走る力、投げる力など、前年代において長期的に低下の一途をたどり社会問題として話題とされ、多くの研究者や教育者が関心をよせている。そこでこの問題解決への手がかりとして「乳幼児をとりまく環境」に注目した。女性の晩婚化や社会進出や高学歴化により少子化が進み、それに伴い出産や育児の機会費用の上昇また子どもに対する価値観の変化がみられ、子育ての仕方など「乳幼児をとりまく環境」が変わりつつある。

本研究では、その「乳幼児をとりまく環境」によって身体発達や体力に影響を与えるかを検討していく。

【方法】

「乳幼児をとりまく環境」の調査資料として、大阪府 A 市の昭和 55 年生まれの全数児を対象として経年的に行われた親子をとりまく環境のアンケート調査（大阪レポート）と兵庫県 B 市で平成 14 年度から平成 16 年度にかけて行われた大阪レポートと同様の質問文章が用いられたアンケート調査（兵庫レポート）を用い、大阪レポートにて乳幼児の心身発達に影響を与える正の相関が得られた 13 項目を比較対象とした。

また、「児童・青年期の身体発達及び体力」については文部科学省の調査資料である昭和 62 年度の小学生スポーツテストとスポーツテスト（旧体力テスト）、平成 21 年度の体力・運動能力調査テスト（新体力テスト）を用い、各身長と体重、そして新旧体力テストにおいて項目の見直しが行われたため追加・削除されたテスト項目を除いた 5 項目を比較対象とした。

【結果】

新旧体力テストでは昭和 62 年から平成 21 年にかけて男女共にすべての項目にて体力低下がみられ、身体に関しては男女共に変化がみられなかった。

乳幼児をとりまく環境として、大阪レポートから兵庫レポートにかけて「父親の育児参加」、「母親が世話をしたり、遊ぶときに話す頻度」に関する項目の割合が増加していた。また「親が近所で世間話や子どもの話をしたりする人の数」、「自分の子どもと一緒に遊ぶ他の子どもの有無」、「母親が自分の子どもができる前の子どもに対する接触の経験」、「おむつや食事の世話以外に遊んだり散歩したりする時間」「天気の良い日に外で遊ばせる」に関する項目の割合は減少していた。また「育児のお手本」「子どもの食事で気をつけていること」に関する項目の割合はほぼ変化はみられなかった。

【考察】

今回の研究の結果から、乳幼児をとりまく環境は児童・青年期の身体発達には影響しないが、体力に影響していると考えられる。「自分の子どもと一緒に遊ぶ他の子どもの有無」がやや減少し、「天気の良い日に外で遊ばせる」ことが減少しているということは体力向上が望める外遊びの時間を親が妨げていると同時に外で遊ぶことによる新たな友達をつくるなどの人間関係の構成の妨げにもなっているという解釈もできる。「母親が自分の子どもができる前の子どもに対する接触の経験」が減少しているということは、子どもを知らないまま親になる親が増加していることが考えられる。そして「父親の育児参加」が増加して「親が近所で世間話や子どもの話をしたりする人の数」が減少しているということは家族一つ一つが孤独化し、地域とのかかわりが希薄化しているとも考えられる。また、身体の発達のみをとりあげたため、心の発達には触れなかったが、体力低下にも関わらず増加傾向を示していた「父親の育児参加」と「世話をしたり、遊ぶときに話す頻度」は身体発達よりも心の発達に大きく影響を与えている可能性がある。